落ちこぼれと言われ続けた僕は彼女達に何の夢を見るか。

べるぬい

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トレーナーとして落ちこぼれと称された鴛鴦　悠。

彼はある日、問題児と言われているウマ娘、ゴールドシップに出逢う。彼女は見た目こそ見目麗しいが、中身はとんでもない破天荒なウマ娘だった。そんな彼女との出逢いから悠の人生はガラッと変わる。

森へ行き、海へ行き、山へ行き、世界の果てまでも行くことになりそうな悠とゴールドシップ。

そんなゴールドシップには夢があると言う。それはエデンへと行き、最強のウマ娘になること。最強のウマ娘になると言うことはレースへ出ること。

でもレースに出るにはまずはチームを結成してメンバーを集めないといけなくて？
前途多難な日々を送る悠。ゴールドシップがいれば毎日がスペシャル！
でも不思議と退屈はしなくて、毎日が充実している事に気付く。
これは落ちこぼれと称されたトレーナーが、ウマ娘である彼女達に夢を見るお話である。

※独自設定あり
※ゲームの世界線寄りです
※モブのウマ娘の名前は適当です
※解釈違いなどある可能性があります
※矛盾など生じる可能性があります
※競馬等の知識はまだまだ初心者です。間違いなどありましたら是非ご指摘お願いします。

目次

1．落ちこぼれ ―― 1
2．ゴールドシップとの出逢い ―― 6
3．デビュー戦 ―― 15
4．加入メンバー誘拐…？ ―― 20
5．メジロマックイーンの夢 ―― 27
6．天皇賞・春 ―― 33
7．メンバーが揃いました ―― 38
8．ゴールドシップの休日 ―― 45
9．夏合宿！ ―― 53
10．夏合宿!! ―― 60
11．夏合宿!!! ―― 67
12．メジロアサマとゴールドシップ ―― 73
13．次のレースに備えて ―― 81
14．神戸新聞杯 ―― 86
15．タキオン製薬 ―― 90

1．落ちこぼれ

「おい。落ちこぼれ！ウマ娘達の水分ちゃんと用意しとけって言っただろ!?ったくトロすぎんだよ」

「……すみません」

先輩トレーナーである牧野先輩が怒鳴る。おかしいな。しっかり用意したはずなんだけどなぁ。

「はぁ。これだから落ちこぼれはよぉ。お前、そんなんだからいつまでも自分のチームが持てないんだぜ？ま、今からチーム作ったとこで誰も入らねぇと思うけどな！」

「すみません」

「ま、いくらでも俺が面倒見てやるよ。扱き使うのに丁度いいしな！」

「……」

落ちこぼれ。とは僕、鴛鴦（おしどり）　悠（ゆたか）のことだ。トレーナー育成機関では最低の成績で卒業したことが由来での落ちこぼれ。

一体何がいけなかったのかは未だに分からない。

僕はウマ娘とはしっかりコミュニケーションを取り、お互い分かりあって高め合うこ

とが重要だと思ってる。
けど僕の通ってた育成機関は何よりも結果を出すことだけを目標にするようなとこだった。僕とはウマが合わなかったのかもしれない。
ウマ娘だけに。
「ミルクパルフェ！エルグランド！サイレンススズカ！エポナ！モモバミ！ソルトマナー！今日は終わりだ！上がっていいぞ！」
牧野先輩はみなにそう言うと、一足先に校内へと戻ってしまった。
今日は練習で使った物が多いから片付けるの大変だなぁ。
「みんなお疲れ様。後片付けは僕がやるから戻っていいよ。ちゃんと休息取ってね」
「……ありがとうございまーす」
特に感謝の気持ちなんて篭ってない言葉が帰ってくる。ウマ娘でさえこの対応である。僕も自分のチームを持ちたいんだけどなぁ。
今から新しいチームを作ったところで入ってくれるウマ娘はいるんだろうか。それも成績最低落ちこぼれトレーナーの僕のチームに。
「はぁ…」
「あの…手伝いますよ？」
「え？あっ…サイレンススズカさん！いやいやいや！疲れてるでしょ？後片付けは僕に

任せてしっかり休んでね！」
「…でもこれらを使ったのは私たちですし…」
「大丈夫大丈夫！ほら僕雑用みたいなとこあるし！ね？サイレンススズカさんはうちのエースだからしっかり休んでね！」
そう言って無理矢理サイレンススズカさんを寮へと帰す。空を見れば赤く燃えてた太陽も沈みかけてる。これは完全に暗くなる前には終わらないなぁ。

◇◇◇

ハードルなどの器具を全て片付け、しっかりと倉庫の鍵を閉める。
後は鍵を職員室に戻せば終わりだ。辺りは真っ暗だ。学園内にある外灯だけが頼りだ。
さて職員室に戻ろうと足を進める。このトレセン学園。生徒数は２０００人弱程いる大きな学園だ。中高一貫で、基本的に生徒は栗東寮と美浦寮の二つに大別される寮で生活している。
ちなみにトレーナーという存在は生徒の数に対してあまりにも人数不足である。おかげでトレーナーにも社宅となる寮がある。生徒の寮と向かい合うように建っており、

学園にも生徒の寮へにも歩いて数分だ。
そんな大きな学園も流石に下校時間を過ぎれば静かだ。いつもの喧騒が嘘のようである。だから気付いたんだろう。誰かがトラックで芝を踏みしめる音に。
「誰か走っている…？」
職員室へと向けてた足を再度トラック側へと向ける。誰かが走ってるということは把握しているが、少し暗くて見にくい。もう少し近付いてみるか。
「ハッハッハッハッ……まだまだ！」
「…あの子はメジロマックイーンさんか」
先程よりも速度を上げて走っているだろう彼女は真剣な顔をしてトラックを走っていた。
メジロマックイーン。明後日にデビュー戦を控えており、今1番注目されてると言われてるメジロ家のお嬢様だ。
「自主トレーニングか。精が出るなぁ」
デビュー戦。本来なら僕も自分のチームを持って、そこに参加していたのかもしれない。きっとメジロマックイーンさんは良きライバルになってたかもしれない。それとも打倒する目標かもしれない。
「はぁ…。自分のチーム持ってみたいな。……ん？」

ふとメジロマックイーンの走りを見ていて、違和感に気付く。
何だか彼女の走り、力が抜けてるような感覚に陥る。気の所為だろうか。噂では期待のステイヤーと言われてるけど、何だか不安定な気がする。スタミナ切れとか起こしてしまったりしないだろうか。
「いやいや担当でも無いのに何か言うのは違うよな。うん。今日はもう帰ろう」
そう自分に言い聞かせ、僕は今度こそ職員室へと足を進め

2．ゴールドシップとの出逢い

トレーナーとは、普通の学校で言ってみれば部活の顧問的立場なので、実は午後からの仕事が専らである。午前は基本的には無い。

朝練がある日か、はたまたウマ娘達の自主トレーニングに付き合えと言われた時か。

しかし僕は自分のチームを持っている訳では無いので、朝から出勤はあまり無かった。

ただ今回、何故か僕がお邪魔させてもらってるチーム、【カルロス】のエース、サイレンススズカさんから自分の走りのフォームを見て欲しいと言われ、珍しく朝から学園のトラックにいる。

「ふう…ふう…どうですか？私のフォーム」

「うーん…そうだな。サイレンススズカさんは見る感じとても体幹が強いと思う。だからもっと前傾姿勢で走ってみるのはどうだろう？」

「前傾姿勢…ですか？」

「うん。こう前に傾く感じで走れば風の抵抗が少なくなると思うんだ。軽く1周してみようか」

「…はい！」

そしてサイレンススズカさんは言われた通り、先程の姿勢とは違い前傾姿勢で走り始めた。その姿勢のおかげか見違えるほどに速くなってるのが分かる。

そしてあっという間に彼女は一周を終えて来た。

「凄いです！トレーナーさんの言う通りにしたらとても速く走れました！」

「それは良かった。あと僕は君のトレーナーじゃないよ」

「でもトレーナーさんはトレーナーさんです」

「いやそうだけど……先輩いないしいっか！」

「そうですよ！……トレーナーさんは自分のチームを持たないんですか？」

「えっ？いや……えっと……」

つい口ごもってしまう。自分のチーム。是非とも持ってみたいものだ。けど落ちこぼれの僕が誰かをスカウトしてみよう。誰も来るわけが無いのだ。

「トレーナーさんがチームを作ったら教えてくださいね！私が入るので」

「えっ？えっ!?いやいや冗談はやめてくださいよ！あはは！」

「ふふっ。楽しみにしてます。今日はありがとうございました。それでは！」

そう言って彼女は去っていった。そう言えばもうそんな時間か。

と言っても教師では無いのでここは一旦寮に戻ろうと思う。

事務作業も特に無いし、久しぶりに朝早かったし、ちょっと二度寝しようかな。

◇◇◇

目が覚め、時計を見ると14時を回っていた。
「結構寝ちゃったな…。まだ時間に余裕はあるし、軽食でも食べるか」
明日はデビュー戦だ。牧野先輩のチームからも一人出走予定だ。エルグランドっていうウマ娘だったかな。気が強いからどうにも苦手だ。
僕も自分のチームを持ってたら今頃は……。いやいやこんなこと考えても仕方ない。そろそろ学園にも向かおう。

◇◇◇

校門を抜け、トラックへと向かう途中、誰かの叫びが聞こえてくる。その叫び声は段々とこちらに近づいてきてるような…
「…おおおおお!!!」
「…おおおおおおお!!!」

「うおおおおおおおおおおおおりゃあああああ!!!!」
長い銀髪をたなびかせ、端正な顔からは想像できない逞しい雄叫びを上げたウマ娘がこちらに向かって走ってきていた。
え？何？怖。
「どこだ!?トレーナーって奴はどこにいる!?確かにここら辺の筈なんだが……」

自分のトレーナーを探してるんだろうか。こんな癖の強いウマ娘がいるチーム聞いた事無いけどなぁ。
そんなことをぼんやりと考えていたら彼女と目が合った。
「おっ？お前トレーナーバッジ付けてんじゃねぇか！じゃあお前で決まり!!」
「え？ちょっ!?」
いきなり頭から麻袋を被せられ、視界が遮られる。え？え？何事？何事ですか???
「よっしゃー!!野生のトレーナーゲットだぜ!!早速アタシの手持ちにしてやろー！」
そして足が宙に浮く感覚を感じる。え？もしかして僕持ち上げられてる??もしかして誘拐されるのか??え??食われる…？
「嫌だー!!食われたくないよー!!」
「うぉ!?暴れんじゃねぇ！別に獲って食ったりはしねぇから安心しろよ！そんじゃレッ

ツゴー！」
「どこにいいいぁぁぁぁ!?」
袋を被せられて何も分からないが、感覚でわかる。僕は今ウマ娘（持ち上げられ、高速で移動してることを。怖すぎる。
「くくっ。お前その袋被ってんの小さい悪夢みてーだな」
「ごめんちょっと意味がわかんない」
「ふっ。大罪は罪ってことだよ」
「いやそりゃそうだろ」
何なんだこのウマ娘。意味が分からない。どうしよう。マジで一体何をされるんだ…？
逃げる算段を立てようと考え始めると同時に、多分移動が止まった。
そしてドアが開く音がする。
「おりゃ！降りろ!!自分で歩けこの野郎！」
「君が連れてきたんじゃないか!!ぷはっ！……え？ここは？」
袋を外し、見えた光景は使われてなかっただろう部室のようだった。
「ふっ。ここはこのゴルシ様が勝手に解放した本部さ」
「本部？何の？」

「見て分からねぇか？ゴルシちゃんが作る最強のチームの本部さ…！」
「チーム…？え？君はもしかしてどこにも所属してないのか？」
「おうよ!!孤高のゴルシ様だぜ!!ふぉー！アタシってカッコイイー!!」
　一人で盛り上がる彼女。名前はゴルシ…ゴルシ？
「ゴルシって……もしかして君はゴールドシップ？」
「ピンポンピンポン！正解した貴方には今から厄介事を押付けまーす！」
「いやいらないです」
　いちいち大袈裟なリアクションと声色を変え、表情筋も絶え間なく動かす彼女はゴールドシップ。学園では問題児と言われ有名だ。
　彼女の行動はとても掴めるものではなく、トレーナーが誰も担当をしようとしないと言う。
　そんな彼女が一体僕に何の用なんだろう？
「なぁお前。名前は？」
「え？あ、鴛鴦（おしどり）　悠（ゆたか）」
「ユタカ…ね！いい名前してんじゃねぇか！このゴールドシップ様の次の次の次ぐらいにな！」
「あぁ…うん。ありがとう…？」

「おう！でよ～？単刀直入に聞きたいんだけどさ～？」
「何？」
一体何を聞かれるんだろうか。さっぱり見当が付かない。なんてったって彼女とは初対面だ。つまり話すことも初めての人だ。マジで何聞かれるんだろ。
「お前、アタシのトレーナーにならないか？」
「え？」
「いやーデビュー戦あるじゃん？あれに出たくてさー！出るにはトレーナーが必要って言うからよ～！慌てて探してんだわ!!」
「え、うん。事情は分かった…よ???」
トレーナー…。僕が…トレーナー…？
これは最初で最後のチャンスなのか？彼女は僕にとっての女神なのかもしれない。掛けてみるのも、良いのかもしれない。
「トレーナー…か。ゴールドシップさんは何の為に走るの？」
「おいおいゴールドシップさんなんて他人行儀で呼ぶなよな！もうアタシ達は親友だろ！ゴルシちゃんかゴルシ様って呼びな!!」
「え…じゃあゴールドシップで…」

「おいおい連れねぇなぁ？で、質問の答えだけどよ。アタシはアタシの為に走るんだよ。あの大歓声をこの身体に浴びて、誰よりも速く、相手をぶっちぎってゴールする。あの瞬間は絶対に最高に気持ちが良いだろ？」
「そっか。じゃあもしかしてＵＲＡファイナルも？」
「ったりめぇよ!!アタシはアタシが認められる最強のウマ娘になるってんでい！」
ゴールドシップには最強のウマ娘になると言う夢がある。そして僕にも夢がある。最強のウマ娘がいるチームを作ること。そうだ。この気持ちだ。久しく忘れていた。
なんで僕はこんなに臆病になってんだろう。1歩でも足を前に出せれば、きっとゴールドシップみたいな娘がいっぱいいるだろうに。
「その話、乗った！これから宜しく！ゴールドシップ！」
「おーよ！トレーナー…いやトレピッピ！宜しくなぁ!!」
僕達は熱い握手をした。僕はこれからずっとこの瞬間を忘れないだろう。死ぬまでずっと。そして夢を叶える為に頑張るんだ。彼女と共に。

……ん？デビュー戦……？
「デビュー戦って明日じゃねぇか!!!!」
「おうそだぜー？宜しくなぁ???」

これは前途多難だなと思いました。

3．デビュー戦

「うぉぉぉぉー!!ファイヤー!!バーニング!!エクスプロージョン!!!!!」

「…あはは…はぁ……」

とある競馬場に来た僕達。そう、今日はなんてったって彼女、ゴールドシップのデビュー戦だからだ。昨日初めて会って即レース。

普通なら有り得ない。けど彼女は普通とは形容し難い存在だから良いのかもしれない。うぅ…緊張してきた。

「えー、こちらレースコース。中継はお馴染み、ゴルシちゃんでお送りします。まずは、新人トレーナーさんに突撃インタビュー☆」

「ええ…?」

「今日のレースに向けて意気込みをお聞かせください！」

「急すぎて何とも言えないです」

「おいおい設定ぶち壊しマンかテメーは?」

いや文句言われても実感が無さすぎて……。昨日の僕もどうかしていた。テンションがハイになってたのが良くなかった。

でもおかげで自分のチーム……チームなのか？まぁ持てたし……？

牧野先輩は変な顔しながら僕を見送ってくれたし。

ここでグダグダしててもしょうがないな。気分変えていこう。

「今日はお前が必要なんだぞ？しっかりしてくれよなー！ほら、トウィンクルシリーズに出るにはトレーナーが必要だろ？」

「チームメンバーも増やさなきゃじゃん」

「お？確か5人以上だっけ？あははー！何とかなるだろー！今スカウトしてこいよ！」

「いや無理だろ!!」

辺りを見渡してみれば多くのウマ娘達が気合いの入った顔で蹄鉄を確認したり、ストレッチしたりしている。

あ、牧野先輩んとこのエルグランドと……あれは…メジロマックイーン？

「お？なんだなんだ？気になる子でもいたか～？」

「うん。あの子」

「おー！マックちゃんが気になるとはお前見る目あるなぁ！」

「どーも」

マックイーン。彼女の走り、少し気になるけど……。

「なぁゴールドシップ。なんで君は僕をトレーナーとして選んでくれたんだ？」

「あ？……まだ気付いてなかったのか？」
「え…うん」
「偶然お前があの時あそこにいたからだろ」
「ですよね～」
　ゴールドシップらしい…のかな。まだ出会って一日。彼女のことは分からないことばかりだ。これからもっとお互い知って行ければいいと思うけど。
「んじゃ！そろそろ行ってくるわー！」
「あ、うん。頑張れ！」
「まぁ、リアクションは悪くねぇしノリもそれなりにいい。アタシはお前のこと気に入ってるぜ？」
　そう言って去っていくゴールドシップ。どんどん小さくなっていく彼女の背中を見て、どういう走りをしてくれるのかと思いを馳せていた。
「そうだよ。僕は彼女の走り方さえ知らないんだな」
　そうして、ゴールドシップのスタートゲートが開いた。

◇◇◇

「ゴールドシップ!!ここで抜き出した!!そしてそのままゴール!!!!!ゴールドシップ！見事デビュー戦を勝利で飾りました!!」

第4コーナーまで後方を走ってたゴールドシップ。彼女は気付いたら全員をぶっちぎって1着でゴールしていた。

凄い。彼女の走り。あまりにも力強すぎる。何て気持ち良さそうな走りなんだ！

ん？ん??ゴールドシップがこっちに向かってくる。

「うっしゃぁー!!ビクトリィ～!!!」

「ぐぇ!!」

「…へへ！どーよ？」

思いっ切りドロップキックをかまされた。…めっちゃ痛い…死ぬ…。

え？何で僕蹴られたん??ちょっと分かんない。

「どうだ？アタシの実力！誰よりも速く目立ってゴールしてやったぜ！これがゴルシちゃんの実力よ～！」

「凄い良かったよ」

「ふっ。お前の顔を見る限り、今一番いい顔をしてるぜ？そんじゃこれからもよろしくな？」

「おう」
　ゴールドシップの手を借りて立ち上がる。めちゃめちゃ痛いけど、それよりも嬉しさが上回っている。あぁ、トレーナーってのはこんな気持ちになれるんだ。
　ずっと夢見ていたこの感じ。気持ちが昂るのが分かる。
「じゃあまずはチームのメンバー増やさないと」
「それもそうだわ！名前も決めようぜ！チーム、女神ゴルーシアでどうよ？」
「却下」
「えぇ～？センス無いなトレピッピちゃんよぉ？」
　今回はオープンのレースだから無い。何がって言うのは、勝ったウマ娘の独壇場、ｗｉｎｎｉｎｇ　ｌｉｖｅだ。彼女達ウマ娘には、歌声と踊りのセンスも必要なんだ。
「そうだな。ディーバ。チームディーバでどうだ？」
「あぁ～ん？アタシャ興味無いからそれでいいぜ～？」
「なんだ君」
　こうしてデビュー戦は無事に終わり、正式にゴールドシップのトレーナーになった。
　誰よりも豪快なウマ娘ゴールドシップ。これから苦労しそうだなぁ…。

4．加入メンバー誘拐…？

「んあー…暇!!ちょっと採集に行ってくるわ！」
「え？あ、おい!!……はぁ…」
ゴールドシップのデビュー戦から三日ほど経った今。チームディーバを結成したのはいいものの、チームメンバーが一人も増えない。
呼び込みとかもしっかりして、主にゴールドシップがチラシとかもばら撒きまくったのに、何の成果も得られませんでした！
いや本当にどうしよう。狭くも一人二人ではガランとして寂しい部室の中、僕はそろそろ本格的に焦ってきていた。
「…ふぅ。僕だけでもスカウトに行かなきゃな」
新たなメンバーを求めて外へと向かおうとすると急に扉が開き、顔面と濃厚接触する。
「ヴッ！」
「あーん？トレーナーかよ！何してんだよ」
「急に開くな…よ……え？その肩に抱えてる袋何…？」

「おー!トレーナーが気になってるって言うからよ!」
　ズルっと袋から出されたのは綺麗な薄紫色の葦毛のメジロマックイーンだった。ん???
「え?いや何誘拐してきてんの!?」
「コイツが新しいメンバーだ!」
「いやいやいやいや!メジロマックイーンさんはもう他のチームに所属して……え?」
「…うっ…うぅ…ぐすっ…うぅ…」
「あれ?泣いてる?マックちゃん泣いてる?」
「ゴールドシップ…謝っとけよ」
「え?アタシィ!?」
　袋からズルズルっと排出されたメジロマックイーンは何故か三角座りをして、膝の間に顔を埋め、本格的に泣き始めてしまった。
　え?これヤバくない?どこか体とか痛めてたらどうしよう!メジロマックイーンさんが所属してるチームからボコボコにされるに決まってる!
　ま、そんときはゴールドシップを犠牲にすればいっか!
「あのー…どうしたんですか?このゴールドシップのせいでどこか痛めたとか…?」
「おい!アタシのせいにすんじゃねぇ!アタシはただ袋に詰め込んで持ってきただけだ

！」

「いやそれ普通に大問題！」

どうしよう泣き止まないよ。お菓子あげれば泣き止むかなぁ。いやでも子ども扱いするな！って怒られる？そもそもこれ社会的にヤバいのでは？

メジロ家に抹殺されるかもしれない！とりあえず早く泣き止ませないと！

「ほら！ここに飴があるよ！とりあえず落ち着こ??ね？」

「…食べます」

あ、え？もしかしてお菓子有効か…？とりあえずメジロマックイーンさんが落ち着くまではそっとしておこうかな。

◇◇◇

「…お見苦しいとこを見せてしまい申し訳ありません」

「いやいや落ち着いたようで何より。うちのゴールドシップがごめんね。怖かったでしょ？」

「頭の中がパニックになりましたわ。…あの一つ聞いてもよろしいでかしら？」

「ん？僕に答えられるならなんでも」

何を聞かれるんだ…?拷問は何がいい…?とか?不味いやはりメジロ家に殺されるのかもしれない!

「あの、ここはチームディーバ、ですよね?」

「そうだぜ!アタシとトレピッピだけの寂しいチームだけどな!」

「あはは。メンバー足りてないからまだ正式に決まってるわけじゃないけどね…。ゆくゆくはって感じかな」

「そう…ですか。あの!私も加入してもよろしいでしょうか!?」

「え!?」

「ほらなー?加入メンバーって言っただろ?」

ゴールドシップの言ってたことは本当だったのか…!でも何で?メジロマックイーンさんは他のチームに既に所属してたはずなのに。

「それは凄い大歓迎だけど……メジロマックイーンさんはもう他のチームに所属してなかったっけ?」

「実は……チームを追放されてしまったんです…」

「え?何で?だってメジロマックイーンさんは、あのメジロ家の」

「やめてください!!!…あ、ごめんなさい…」

思ったより深刻な理由があるのかもしれない。詮索は程々にしておこう。じゃない

と多分僕が抹殺される。
「…あの、３日前のデビュー戦ありましたよね？」
「うん。ゴールドシップが勝ったやつだね」
「エクスプロージョンしたからな！余裕だったぜ！」
「私はそのレースで酷い結果を出してしまって、それで期待外れだと言われて……その、恥ずかしながらチームを追い出されたんです」
なるほど。確かメジロマックイーンさんが所属してたチームは【エギル】。強豪チームで、このトレセン学園でも１番注目されてるチームだ。
結果が出せないウマ娘は必要無い、のかもしれない。
「その、私は今家の方でも立場が危うくて…」
「え？」
「結果が出せないとなれば、もしかしたら勘当されたりするかもしれないんですの…」
「あちゃー。でもそれなら尚更別のチームに入った方がいいんじゃ…」
何で無名なチームであるここに来たんだろう。いやゴールドシップが無理やり連れてきたんだった。彼女程の実力なら引く手数多だと思うんだけどなぁ。
「では、では一度私の走りを見て貰えません？それで判断をしていただきたいです」
「分かった。僕としては加入は大歓迎だからね。それじゃあトラックへ行こうか。ゴー

ルドシップもついでに……あれ?」
ゴールドシップはいつの間にか消えてた。

◇◇◇

「はぁはぁ…はぁ…ふぅ。…どうでしたか?私の走りは?」
トラックを3周ほどしてもらい、じっくりとメジロマックイーンさんの走りを見た。しかしどうにも足に力が入っておらず、ステイヤーと期待されてた割には確かにスタミナ切れが目立ってるかもしれない。
その通りなのか、息も荒い。何が原因なんだろう?
「足に力が入って無いんじゃないかな?って思うんだけど…どう?」
「…!そうです!そうなんです!なぜ分かったんですか?」
「いや、勘かな……。他の長距離ウマ娘に比べるとスタミナ切れも目立つし……ん?お腹に手を添えてどうしたの?具合悪い?」
「い、いえ!なんでもないですわ!」
そうメジロマックイーンさんが否定した時、ぐ～、とお腹のなる音が響き渡った。この音は勿論僕ではない。そして近くには僕とメジロマックイーンさん以外はいない。

「うっうぅ……！恥ずかしい！恥ずかしいですわ!!」
そう言ってしゃがみこんでしまった。もしかしてご飯をしっかり食べていないのか？
「ねぇ。メジロマックイーンさん。ご飯しっかり食べてる？」
「え？えぇ。必要なカロリーはしっかり摂取していますが……あっ！」
しゃがみこんでから勢いよく立ったせいか、メジロマックイーンさんはふらついて倒れそうになる！
「危ない！」
間一髪何とか受け止める。近くに立ってて良かった。メジロマックイーンさんは大丈夫だろうか。
「メジロマックイーンさん？大丈夫…？あれ？おーい」
メジロマックイーンさんは気を失っていた。これ不味いじゃん！
僕はメジロマックイーンさんをしっかり抱き抱えて、保健室へと急いだ。

5．メジロマックイーンの夢

メジロマックイーンさんを保健室に連れてきてから３０分程。

廊下の方からバタバタと足音が聞こえてくる。そして勢い良く扉が開かれ、一人のウマ娘が入ってくる。

「マックイーン!!倒れたって本当!?!!」

「しーっ！静かに静かに。寝てるから」

「あ、すみません。もしかして貴方はマックイーンのトレーナーさんですか？」

「いや、まだ違うけど近々なる予定のトレーナーさんですね」

「そうですか。あ、私はメジロライアンと言います！よろしくお願いします！それでマックイーンは何で倒れたんでしょうか？」

養護教諭から聞いた診断結果では貧血、とのことで栄養不足が原因と言われた。それをメジロライアンに伝える。

「そうですか…。デビュー戦を前に多分食事制限をしていたのが原因かもしれませんね」

「食事制限？」

「はい。マックイーンは、責任感が強すぎるって言うか、自分で自分を追い込んじゃうんですよね。メジロ家としての役割を果たす為とは言え…」
　メジロ家の役割。天皇賞・春を制覇のことかな。起きたらマックイーンに聞いてみようと思う。
「そんなことしなくたって、マックイーンはちゃんと立派にやってるのに」
「心配してるんだね」
「はい。…あっ！もう行かなきゃ！あの、マックイーンのことお願いします！それでは失礼しました！」
　礼儀正しいメジロライアンは、そう言い急いで保健室を駆け去っていった。

◇◇◇

「そう…でしたか。トレーニング中に意識を…。大変なご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ございませんでした！」
「いやいやそんな。むしろ僕がいる時に倒れてくれてよかったよ。もしメジロマックイーンさんが一人の時とかだったら、それこそ大変だったろうし」
「そう…ですよね」

あぁ、多分この子はこうやって自分の悪い所を反省してるんだ。
そして責任感が強く、今以上に自分を追い詰めてしまうんだ。
次こそは。今度こそはって。きっと全部一人で背負い込んじゃうんだな。
「ねぇメジロマックイーンさん」
「はい。なんですの？」
「メジロマックイーンさんには夢はある？」
「夢…ですか？」
「そう。夢。君が目指してる夢」
「……天皇賞を制覇することですわ」
やっぱり。メジロ家と言えば天皇賞のイメージがある。確か先代や先々代も皆天皇賞を優勝していたんだっけ。
それは確かにプレッシャーにもなるけど、憧れの夢にだってなるはずだ。
「ねぇ。その夢さ。僕にも手伝わせてよ。僕のチームに入るんだろ？それなら本音を言って欲しい。あ、やっぱり入らないとかだったら……大丈夫です…」
かっこ悪いなぁ僕。こういうのは意外とゴールドシップの方が向いてるかもしれない。
「僕のチームに所属するなら、マックイーンさんの夢、手伝わせて欲しい。これは本気だ

よ」
「いいんですの？本気で私の手伝いをするということは、メジロ家の使命を共に背負うということ。トレーナーさんに、その覚悟はありますの？」
　とても心配そうな目でこちらを見てくる。逆に何でそんなことを聞いてくるんだろう。当たり前じゃないか。そんなこと。
「当たり前だ。僕はトレーナーだよ？君たちウマ娘のサポートをして、君たちを栄光に輝かせるのが僕の役目だ。って僕は思ってる」
「私と……その、一心同体のような関係になる覚悟も、ですか？」
「うん！……ん？」
　一心同体…？いや夢を目指すんだから当たり前か。うん。メジロマックイーンさんのサポートをこれから全力でしていかなきゃ！
　よーし頑張るぞー！
「そしたら私は何をすればいいんでしょうか？」
「そうだな。メジロマックイーンさんは」
「あの、メジロマックイーンさんと呼ぶのは長ったらしいので手その、マックイーンで大丈夫ですわよ？」
「あ、そう？じゃあマックイーンさんが倒れた理由なんだけど、栄養不足が原因の貧血な

んだって。カロリーは取ってるって言ってたけど……多分それじゃあダメなんだと思う」

　カロリーは計算上足りてても、あまりにも量が足りてないんだと思う。多分。

「お前まーだ食事制限とかやってんのか！もしかしてＬＯＶＥが止まらねー甘いもんも我慢してんのか？呆れちまう精神力ですわね～」

「うわっ!!!ビックリした!!ゴールドシップかよ」

「いぇーい！マックちゃんが倒れたって聞いてな！駆け付けてきたぜ！」

「ん？マックイーンさんは甘いものが好きなのか？」

「え？え、えぇ。大好物ですわ！でも、その、私…実はその太りやすい体質でして…体重が増えるとレースに影響も出てきますし…」

　なるほど。その為の食事制限か。でもそのせいでスタミナが付かないのなら本末転倒だ。それなら…よし！

「そしたらマックイーンさん！脂肪になりにくい献立メニューを参考にすれば良いんだよ。それなら甘いものも食べれるし、お腹いっぱい食べれると思うんだ！」

「脂肪になりにくい献立…ですか？」

「そう。まぁ基本的にダイエット食品になると思うんだけど、今より満足したご飯が食べれると思うよ」

「そうですか。参考にしてみますわ。その、今日はありがとうございました。明日から是非よろしくお願いします！」
「お？お？マックちゃん加入か？」
「はい。よろしくお願いしますね？ゴールドシップさん」
やったー！これでようやくメンバー2人目だ！あと3人か。先はまだまだ長いけど、順調なスタートを切れてると思う。
ゴールドシップとメジロマックイーンの夢。絶対叶えてみせよう。
「それじゃあマックイーンさん。お大事にね」
「ちゃんと飯食うんだぞ～！全ての食べ物に感謝してな！あばよっ！」
「ありがとうございます…！」

6．天皇賞・春

あれからマックイーンは無事に健康になり、力強く速く、持久力のある走りが出来るようになっていた。そしてオープンのレースに出走し、実力と自信を付けていた。

ゴールドシップも色んなレースに出走しては優勝を取りまくっていた。舌をべろべろ出しながら走ってることに気付いた時はビックリした。何はともあれ、二人は好調なスタートをきっている。

そして今日。ついにメジロマックイーンが悲願とする天皇賞・春の日が来た。

「……」

「……あの、さ。レースが終わったら何か食べよう？今日ぐらいは好きな物、食べていいと思うんだけど」

「そうですね。せっかくの京都ですし！……はぁ。緊張ほぐすの下手くそですか？」

「そうかも…」

「んもう！しっかりしてくださいませ！」

不甲斐ないトレーナーでごめん。緊張が凄い。ゴールドシップの時はこんなに緊張しないんだけどなぁ。

「…ふぅ。夢は今私の目の前にあります。あとはそれを掴むだけ。応援、していてくださいね？」
「あぁ。ゴールドシップと応援してるよ。マックイーン」
「ええ。必ず勝ってまいりますわ！」

◇◇◇

『レースもいよいよ終盤！各ウマ娘が第３コーナーへと差し掛かります！盾の栄誉を手にするのは１番人気、メジロマックイーンか!?はたまた他のウマ娘か!?』
調子は悪くありませんわ。この調子で行ければどんなに楽か。
しかし現実はそう優しくはありませんね！ライアン、やはり貴方が上がってきますか！
『おおっと!!ここでメジロライアンがペースを上げてきた!!前を行くマックイーンとの差が徐々に縮まっていきます！最終コーナー！残り６００！後続も次々と差を詰めてきた！メジロマックイーン、ここまでか!!?』
ここまでなはずありませんわ…！勝利に向けてやってきた努力。私を支え応援してきてくれたトレーナーさんに応えなければいけません。

その努力の成果、ここで見せて差し上げますわ!!

『ここでメジロマックイーン、一気にスパートをかけたー!内からライアンも上がってきた!もの凄い末脚で前へ迫る!しかしどうした!?マックイーンとの差が縮まりません!!速い!速い!マックイーン!速すぎる!!』

「やぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

『先頭はメジロマックイーンだ!!メジロマックイーン優勝!!やりましたメジロマックイーン!見事、春の『天皇賞』を制覇しましたーっ!』

◇◇◇

「マックイーン!!おめでとう!!やったな!!」

「うぉうぉぅぉう!このゴールドシップ!感動しちゃったぜー!」

「……」

「マックイーン?」

「マックちゃん?」

「やりましたわー!!!」

「どおわっ!!」

とんでもない勢いでこちらを向いてきたかと思えば、そのままの勢いで、メジロマックイーンが抱きついてきた。やば、倒れる。

「あ痛っ!!」
「天皇賞制覇を成し遂げましたわ!!これでメジロ家に私の盾を飾れますわ!!」
「近い近い近い」
　我を忘れるほどの喜び。あのメジロマックイーンがこんなにも喜びを露わにするなんて。想像もつかなかったな。
　いや、本来はこれがマックイーンの素なのかも。この勝利へ価値、そしてそれだけのプレッシャーで自分を押さえ込んできたのかもしれない。
「おいマックちゃん離れろ!トレーナーはアタシのもんだ」
　そう言うとゴールドシップはマックイーンをむんずと軽々片手で持ち上げる。
「コホン…ごめんあそばせ。でも、それほどの結果なんですもの!」
「うん。本当におめでとう!」
「そして、この結果を出すことが出来たのはトレーナーさんのおかげです。私の為に尽くしていただいて、本当に感謝していますわ」
　感謝。感謝するのはこっちの方だ。こんな落ちこぼれの新米に着いてきてくれて、僕には勿体ないぐらいの結果をプレゼントしてくれた。
　でもそれを言うのは野暮な気がしたので――
「僕達チーム【ディーバ】で掴んだ勝利だ」

「ふふっ！これからもたくさん勝利を重ねて差し上げますわ！」
「おっしゃー！ゴルシちゃんも頑張るぜー！見ててくれよな！トレーナー！」
「おう！」
　ここまでは良かった。良かったのだが。
「え？チームメンバーが足りてない上での出場をしてたから今までは大目に見るが、次からは出場できない？」
「え？」
「は？」
「いやそれもそうだよ。なんで逆に僕達チームメンバー足りてないのに、天皇賞とか出れてんの？」
「ふっ。このゴルシ様にかかれば偽造なんて容易いもんよ……！」
　マックイーンの夢を叶えることばかりに集中していたから、大切なことを忘れていた。まだチームメンバー足りてないじゃん!!あと3人は連れてこないと！
「よし。とりあえず今日からはメンバーを探すことを中心に動くぞ！」
「おー！」
　相変わらず前途多難だなぁと思う日々だった。

7．メンバーが揃いました

「なートレピッピ～！さっきから後ろ着いてきてるフードの被ったあのチビ、誰？」
「知らない。ゴールドシップの知り合いじゃないの？」
「アタシも知らねーよ！サングラスも掛けてるしよ～」
「それは君もじゃないか」
　メンバー集めの為に学園内を散歩していた僕とゴールドシップ。何故かゴールドシップは焼きそばを売りながら歩いている。
　焼きそばを買えば【ディーバ】に入れる特典付きだ。今んとこ全員に断られてるけど。
「ていうかよぉ。マックちゃんと来た方が良かったんじゃねぇーの？」
「ゴールドシップの方がいいよ」
「はーん？そりゃなんで」
「目立つからかな。それにゴールドシップは綺麗だし……あーでも問題児って言うイメージがついてるのか」
「ん？あぁわりー、今『バウンティーハンター曽我部』のこと考えてた」
「そういうとこだよ。っとりゃ!!!捕まえた!!」

ずーっと後ろから着いてきていた謎の小さい少女をずた袋で捕獲することに成功。これもゴールドシップのおかげで身に付いたスキルだ。

これで誘拐も楽々に出来ちゃうね！いい子のみんなは真似しちゃダメだぞ☆

「よーしよくやった！それでこそアタシのトレーナーだぜ！」

「部室に戻るぞ！」

「おっしゃ任せんしゃーい!!」

全力疾走でここから退散。見られてたら不味いからね。

◇◇◇

見られてました。何と生徒会長に呼び出されました。何で生徒会長？

「初めまして、ですね。私はこの学園の生徒会長、シンボリルドルフです」

「あ、ども初めまして～…ッス～あのなんで僕呼び出されたんですかねぇ」

「チームメンバーが欠員しているのに、天皇賞へ出たことを咎める為、かな」

「なんだそっちかぁ……そっちもダメじゃん！すみません！別に悪気はなかったんです!!」

「冗談です。実はですね、貴方の実力をこの学園の理事長が買っているんです」

「え!?」

秋川やよい。このトレセン学園の理事長を務めている人だ。そんな人が僕の実力を…?

「問題児と呼ばれていたゴールドシップを従え、期待外れと蔑まされていたメジロマックイーンを天皇賞で優勝させる。これ程のことがあろうか。貴方は素晴らしい実力を持ったトレーナーだ」

「えっ…あ、え?…ありがとうございます?」

「なぜ疑問形なのです。もっと自信を持ってください」

落ちこぼれと言われていた僕はただ自分が正しいと思ってたやり方でやってきた。そした優勝を勝ち取ったのは僕じゃない。ウマ娘達自身だ。

「別に僕じゃなくても、彼女たちはいずれこうなってたと思いますよ」

「ははっ。謙遜なさるな。それで本題です。この子を貴方のチームに入れて貰えないでしょうか?」

「いぇーい!僕だよ!!」

「うわっ!」

1人のウマ娘が会長の座っているソファの後ろから出てきた。ずっと待機してたのか…?

「彼女の名はトウカイテイオー。ほら挨拶しろ」
「七戦七勝！無敗のウマ娘、トウカイテイオーだよ！よろしくね！」
「彼女は走りも素晴らしいが、ダンスと歌が上手い。そちらのウマ娘達の良き指導役となるでしょう」
「あっ…それは有難いです…」
　ゴールドシップはダンスは凄いが歌がダメで、メジロマックイーンは歌が上手いけどダンスがダメだった。トレーナーと言えどそこは僕も専門外で困ってたところなのだ。
「んじゃ今日からよろしくね！トレーナー！」
「う、うん」
　トウカイテイオー。元気なウマ娘だ。これでチームメンバーが1人増えた！あとは二人だ！よーし頑張るぞー！

◇◇◇

「トレーナーさん！なんですのこれは?」
「ちょっと僕も分からない」
「チームメンバーが揃ってますわよ!?…え?何があったんです?」

「ちょっと分からないな…」
　トウカイテイオーを連れて【ディーバ】の部室に戻ってきたら、ゴールドシップとメジロマックイーンの他にウマ娘が二人いた。
　てか一人はサイレンススズカさんじゃん!!
「え!?サイレンススズカさん!?」
「お久しぶりです。トレーナーさん。チームを結成したと聞いたので、こちらに移籍しました。よろしくお願いしますね?」
「えっ」
「トレピッピ!捕獲したのはコイツだったぜ!」
「ひぃ…すみませんすみません…!」
「あっ君は…」
　生徒会長室に呼び出される前にずた袋で捕獲したストーカーはどうやらウマ娘だったようだ。しかも僕はこの子を知っている。
　この子はライスシャワー。よく、夜遅く最後まで練習を頑張ってた子だ。
「えっと、君はライスシャワーだよね?何でストーカーなんて?」
「えっ…あの…私、ずっとレースに勝てなくて、でもメジロマックイーンさんのレースを見て、勝ちたいって気持ちが強くなって……そのチームに入れば私も強くなれるのか

なって思って…それで…」
「なるほど？もしかしてうちに加入したいって感じかな？」
「は、はい!!」
　ゴールドシップとメジロマックイーンと顔を合わせる。そして頷く。
「よっしゃぁぁぁ!!やったな！トレピッピ！」
「やりましたわ!!これでチームを正式に結成できますわ！」
「やったー！僕の初めてのチームだー!!」
　これで5人、チームメンバーが揃った。今度こそチーム【ディーバ】の結成だ。ようやく僕の夢へと一歩近づけた。
「そんなら自己紹介が必要だな！アタシがつうと言えばコイツはかぁ。アタシが風神ならコイツも風神。そんな関係をトレピッピちゃんと結んでるアタシはゴールドシップってんだ！よろしくな！」
「そうだな。ゴールドシップとの関係は一言じゃ表せないな！」
「メジロマックイーンですわ。トレーナーさんとは一心同体の関係ですわ。これからよろしくお願いしますわね！」
「それ誤解招くと思うんだ」
「サイレンススズカです。トレーナーさんとは前のチームに所属していた時から知り合

いでした。よろしくお願いしますね」
「うん。本当にうちに来ちゃったんだね」
「トウカイテイオーだよ！無敗のウマ娘だよ！歌とダンスが得意だからｗｉｎｎｉｎｇ　ｌｉｖｅの指導なら任せてね！」
「めちゃめちゃ頼りにさせてもらいます」
「あ、あのライスシャワーです…。勝ちたいという気持ちは誰にも負けません…！これからよろしくお願いします！」
「僕は鴛鴦　悠！このチームのトレーナーです！みんなこれからよろしくお願いします!!」
　僕達はこれからだ。これから有名になって強くなって、夢を叶えるんだ！

8．ゴールドシップの休日

よぉ！俺様はゴールドシップ！今日も地球の平和を救うために海へ山へ森へ田舎へ都会へ宇宙へ行くぜ！

っつーのは冗談で、今日は休日だから久し振りに出掛けるんだわ。

てことでしゅっぱーつ！

◇◇◇

さて、と。今日は何を買おうかな～！・マックちゃんも無事に天皇賞・春を優勝し、チームメンバーも増えた！・全部トレーナーのおかげなんだ。やっぱりアタシの目に狂いはなかったんだなぁって思う。

あのトレーナー、最初は頼りなかったけど……今も頼りねぇけど。でもアイツは1番にアタシ達ウマ娘を見てくれるからな。悪いトレーナーじゃねぇ。

あっと、水着コーナーはここか。実は来週の8月からマックちゃん、つまりメジロ家の別荘を借りて夏合宿するんだ！

プライベートビーチもあるから遊び放題だとよ！・超楽しみじゃね？・海底神殿探すし

かねぇよなぁ。
「…うーん。これとかライスさんに似合うんじゃないかしら？」
「ほんとですか？」
「えぇ。青い薔薇のモチーフが可愛いですもの。ライスさんにピッタリですわね」
「えへへ…試着してこようかな」
おぉい！噂をすればあれマックちゃんとライスシャワーじゃねぇか！
こっちに来るじゃん。
「あ、すいませ…わぁ…」
「ライスさん？どうしたのです？…あら、すみません。そこの試着室借りたいんですけど」
「え？」
どうやらアタシが邪魔でライスの奴試着室へ行けなかったみたいだな。てかコイツらの感じ、もしかしてアタシに気付いてない…？
「ありがとうございます」
「…もしかして気付いてない？」
「は？何がですか？」
「マックちゃ～んアタシだよアタシ～！」

「ええ!?ゴールドシップさんですの!?」
「え!?ゴールドシップさんなんですか…!?分からなかったです…!」
　ええ？別に私服着てるだけじゃねぇか。そんなに分からないものか？
「全然分かりませんでしたわ。貴方、あのヘッドギアを外すだけでそんなに雰囲気が違くなるものなのですね」
「ゴールドシップさん…凄い美人さんですね…！」
「お？分かってんじゃねぇか！んで、オマエらも水着見に来た感じか？」
　先程の会話から察するに、来週の合宿のための水着選びだろうな。
　アタシと同じか。でもなぁ…こういうのは一人で選びたいんだよなぁ。
　アタシはここで退散するかねぇ～。
「ええ、そうですわ。ゴールドシップさんもそうなん…あれ？」
「ゴールドシップさんならもう行っちゃったよ」
「…はぁ。あの人らしいですわね」

◇◇◇

「ねぇ見て！あのウマ娘さんめちゃめちゃ美人じゃない？」

「そうね…！あ、テイオー。そこのスイーツ屋さん美味しそうじゃない？」
「ほんとだー！僕一応食べログとか確認してみるねー！」
「ふふ。お願いね」
おぉう。あれはテイオーの奴とスズカか。アイツらも仲良く出かけてんのな。
スイーツか。……アタシも何か甘いの食べたくなってきたな。どこかの喫茶店にでも入るか！
てかもしかしてアタシだけ誘われてないな？泣いちゃうぞゴラ。
しかし街中を歩くのも暑くてしょうがねぇ。近くにあった喫茶店が目に入り、つい扉を開いてしまう。扉を開いた瞬間に冷気が一気に体を突き抜けていく。
くそ涼しいな。流石のゴルシちゃんも暑さには勝てねぇ。ゆっくりと休むとしよう。
店内の奥の席へと案内される。そこに買った荷物を置いて、座る。
よーし、何頼もうかなぁ！冷たくて甘いものがいいよな。
かと言って、今はソフトクリームみたいなものの気分じゃねぇ。
うし!!この人参ジュースとかき氷だな!!

◇◇◇

注文してから10分程で頼んだメニューが来る。うひょー！美味そうだぜ！
「いただきます」
カラッカラに渇いた喉に人参ジュースが効く。美味っ！犯罪的だ！てか犯罪だわこれ。堪んねぇよ。
かき氷もひんやりと更に体を冷やしていく。夏はやっぱり氷菓だよなぁ。それにしても美味しいな。今度マックちゃん連れてくるか。お礼に奢ってもらおう。
「ふー。にしても誰もアタシのこと分かんねぇんだな。変装の天才すぎるだろ。ここはマジで怪盗になるか？予告状でも書くかね～」
にしてもマックちゃんはライスと。スズカの奴はテイオーと。何でアタシを誘ってくれなかったんだ!!暇じゃねぇか。
あぁぁ～。一気に疲れが来て、テーブルに身を預ける。あ、ひんやりしてて気持ちい。じゃねぇ。暇だなぁ。
「ねぇねぇウマ娘のお姉さん。今一人？俺らと遊ばね？」
「あ？」
声がする方に顔を向けると、チャラチャラした男3人組がいた。んだぁ？コイツら。
「なんか用か？」
「いやいやだから、暇なら俺らと遊ばね？」

「さっきから暇そうだったしな！ここの代金は払うからよ！遊びに行こーぜ！」
もしかしてこのゴルシちゃん、ナンパされてる？くっくっくっ。アタシの美貌に男たちもメロメロって訳か！く～っ！たまんねぇな！
「悪いけどお断り。アタシは今忙しいんだわ」
「そんなこと言っちゃってー！暇そうじゃん」
「なっ？おい！触んじゃねぇ！」
つい反射的にチャラ男の手を振り払う。ったくこのゴルシ様に触るんだったらちゃんと国に許可を取るんだな。
「あ、この女！舐めやがって！」
手を振り払われた男がキレる。やべーこりゃ殴られるか？でもやり返したらヤバそうだしなぁ。黙って殴られとくか！後で違うやり方でやり返してやるからな？
顔に来るだろう衝撃に備え、ギュッと歯を食いしばる。
あ？なんの衝撃も来ねぇ。そう思い、目を開けると
「や、ごめん。待った？」
チャラ男の手を掴んでさも何も無いかのように話しかけてくるトレーナーが目の前にはいた。コイツやっぱり最高だわ！
「ふふっ…ナンパに絡まれてるの～。助けてダーリン？」

声を作ってぶりっ子する。ふっ。もしかしてアタシ声優向いてんじゃね？まずはＹｏｕＴｕｂｅ活動から始めるか！

「そりゃ大変だ。すいませんこいつ僕の連れなんすよ。帰ってもらっていいですか？」

トレーナーがそう言うと、変な顔をして男たちは去っていく。ケッ！

ざまぁみろってんだ！にしてもトレーナーアタシのことにすぐに気が付いたな？

「あー…なんかすみませんでした。大丈夫でした？それじゃあ僕はこれで」

あ、この感じ、トレーナーも気付いてねぇな。アタシってそんなに雰囲気変わるのか？

「んんっ。座ってください」

「え？」

「座ってください。話し相手になってください」

「あぁえっと…それじゃあ失礼します」

コイツは多分アタシだって気付いてない。じゃあ何で助けてくれたのか。それを聞きたかった。

「何で私を助けてくれたんですか？」

「えーっと。まぁ男３人に囲まれてたし、困ってたし……お節介かなとは思ったんですけど、その、自分が担当してるウマ娘に凄い似てるなって思って……見過ごす訳にはい

かないなーって」
「…っ！」
つくづくコイツは最高だなと思う。ほんとアタシの目に狂いはなかった。
「ふふ。実は私ゴールドシップの姉なんです。妹のことよろしくお願いしますね」
「え？そうなんですか!?…あれ？でも僕担当がゴールドシップなんて一言も…」
「あっ」
「……おいもしかして君ゴールドシップか？」
「てへぺろ！」
「はぁ～なんだよ。恥ずかしい～……忘れてくれよ今の」
「そうだなぁ…それじゃあトレピッピ！ここのかき氷買ってやんよ！財布だしな！」
「それ結局支払いは僕じゃん！ま、いいけどさ。奢るよ」
コイツはアタシの最高の相棒だ。来週の夏合宿が楽しみだぜ。
そのまま二人で同じ時を過ごし、一緒に学園の寮へと帰った。
後日トレーナーに美人ウマ娘の彼女がいると噂になったのは言うまでもないな！
だってこのゴルシちゃん最高に美人だもーん☆

9．夏合宿！

「凄い…海だ！綺麗…！」
　ライスが感嘆の声を上げる。今僕はマックイーンを除いたメンバーを車に乗せ、海の見える道を走っている。
　目的地は、メジロ家の別荘である。夏合宿を行うという事で、メジロ家の方々が快く貸してくれることになったのだ。
「うぇーい！お菓子食べようぜ！」
「僕も食べるー！ちょーだいちょーだーい！」
「え、何そのお菓子めちゃめちゃ気になるんだけど」
　ゴールドシップが取り出したお菓子は謎のグミと言う、謎のグミだった。いや謎すぎるんよ。何それどんな味すんのよ。
「ゲホッゴホッ！うぇぇ…何味これ…」
「ん？わさび味」
「ぶぇぇぇ」
「あああテイオー吐くならこの袋に！」

危なかった。テイオーが口からグミを吐き出して車が汚れるとこだった。ゴールドシップはなんで普通の顔して食べてるんだよ。おかしいだろ。

「あ、そろそろ着く…よ……？」

「あ、本当で…す…ね…??」

助手席に座るスズカと僕の口があんぐりと開かれる。メジロ家の別荘。めちゃくちゃデカいんだけど。え？豪邸じゃん。僕達が使っていいものなのこれ。

ちょっと緊張しながらも別荘の門の前に行く。門の前に行くってなんだ。凄すぎる。これがセレブって奴なのか。

すると勝手に門が開く。すげぇ…開いた口が塞がらないよ。

「お金持ちって凄いですね…」

「だね…。マックイーン恐るべし…」

◇◇◇

メジロ家。ウマ娘界隈では知らぬものはいないと言われるほど、数多くの名ウマ娘を輩出してきた一門。そのメジロ家の別荘の前に僕達はいる。

車を降り、荷物を降ろしていると所謂執事服を来た老齢の男の人とメイド服を来た女の人達がが近付いてきた。え？召使いってやつ？

本当のお金持ちじゃん。凄いなぁ。スズカなんてさっきから口が閉じてないよ。顎外れちゃうんじゃない?

「ようこそいらっしゃました。チーム【ディーバ】様。私、メジロ家に務める執事でございます」

「あっはい。僕は【ディーバ】の担当トレーナーの鴛鴦(おしどり)　悠(ゆたか)です」

「はい。鴛鴦様ですね。マックイーンお嬢様から聞いてます。とても優秀なトレーナーであると」

「えぇ!?僕がですか!?そんな、僕なんて全然ですよ!」

ほんとほんと。僕なんてまだまだです。あ、と気付けばいつの間にいたのだろうか。スーツを着た男の人達が僕たちの荷物を持っていってくれている。

「では皆様は私に着いてきてください」

「あ、はい。みんな、着いてきて」

僕の後ろにゾロゾロとみんなが着いてくる。珍しくゴールドシップが大人しい。流石のゴールドシップも緊張とかするのかな。てかなんで室内でサングラスかけてんの??

「…む?…!?もしや貴方…ゴールドシップ様でございませんか?」

「ちちち違いますけどー?」

「え?ゴールドシップ様…?」
みんなが困惑している。どういうことだ?ゴールドシップ『様』?
もしかするともしかするのか?
「…あぁぁぁーもうっ!!なんで爺やがいるんだよ!まさか別荘の方にいるとは思わなかったぜ!」
「やはりゴールドシップ様でございますか」
「くそ〜。特に何にもなくやり過ごせると思ったんだけどなぁ…」
「ちなみに御祖母様も来ていらっしゃいますよ」
「はー!?おいおいそれは聞いてねぇって!婆ちゃんはいつも実家の方に居るだろ!?滅多にここ来ねぇじゃねぇか!」
話から察するにまさかとは思うが、ゴールドシップはメジロ家出身ということなのか?嘘だろ??あのゴールドシップだよ?
「後ほど顔を出せと申していました。挨拶に伺うことを推奨しておきます」
「…くそ。どーせアタシは嫌われてるからよぉ…なるべく会いたくねぇんだよなぁ」
結構訳ありなのかな。詮索はよしとこうか。
「…はぁ。トレピッピちゃ〜ん。悪いけどアタシの荷物頼んだわ。じゃ、また後でな!」

「あ、うん」

そう言ってゴールドシップは僕たちとは違う方へと突き進んで行った。しっかし凄いな。家の中で迷子になりそうだよ。スズカやテイオーも落ち着きなく周りをキョロキョロしている。

「こちらが客室でございます。トレーナーさんはこちらの部屋。ウマ娘の皆さんはこちらの部屋をそれぞれお使いください」

「あ、ありがとうございます」

「食事や湯殿の方はこちらで準備をさせていただきます。食事の時間は決まっておりますが、湯殿の方はいつでも解放してますゆえ、ご自由にお使いください」

「あぁ何から何までお世話になります」

食事やお風呂まてま用意してくれてるのか。ありがたいなぁ。後でな!マックイーンにお礼を言わなきゃ。

それと執事さんが言ってた御祖母様って、多分メジロ家の伝説の人だよな。挨拶しとかないと…。

「トレーナー!これから早速特訓の始まり?」

「そうしたいけど、ゴールドシップがいないからね。それに長時間車にいたのもあって疲れてるでしょ?とりあえず一時間は自由時間で。しっかりストレッチとかしてお

いてね」
「はーい！」
テイオーに旨を伝え、自分にあてがわれた部屋へと入る。一人には寂しいぐらいに広く綺麗な部屋だった。確かにこれぐらい広ければ、テイオー達が全員同じ部屋でも全然大丈夫だな。
でもちょっとこの部屋に一人は寂しいなぁ、なんて思いながら持ってきた荷物をカバンから取り出す。
基本的には砂浜での練習を想定しているので、特に道具は持ってきていない。ハードルや重量を増し増しにした蹄鉄などだ。
これらを使ってどんな特訓をしようか悩んでると、勢い良く扉が開かれる。
「うわっ!?ビックリした…！ゴールドシップか」
「おいトレーナー。婆ちゃんが呼んでる。着いてこい」
「あ、うん。ねぇゴールドシップ」
「あ？」
「良かったら後で君のことをもっと教えてよ。僕は君のトレーナーだってのに、まだ君のこと知らないことばかりだからさ」
「…そうだな」

ゴールドシップと約束を交し、メジロ家の主人の元へと案内されていく。やばいめちゃめちゃ緊張してきた。

何をどう挨拶すればいいんだ!!

10．夏合宿!!

今、僕はとある個室にある方と2人っきりである。しかも空気が重い。なんてったってお相手はあのメジロ家の主たる人だ。

その名もメジロアサマ。当時芦毛の馬は弱いと言われていた時代で、初の天皇賞を獲った伝説のウマ娘だ。

ウマ娘界隈でこの名を知らない人はいないと言っても過言じゃないと思う。

「…ふぅ。鴛鴦（おしどり）悠（ゆたか）さん、ですね？」

「は、はい！今日から1週間お世話になります！」

「ふふ、頭を上げてください。貴方の話はマックイーンから聞いてます。とても素晴らしいトレーナーだと」

「いえいえそんな！僕なんてまだまだヒヨっ子です」

執事さんにも言われたけど、お世辞とは言え、こう言われるのは悪くない。むしろ嬉しいとさえと思う。いずれもっと実力を付けていかないと。

「マックイーンはそれは凄かったんですよ。天皇賞・春を優勝できたのはトレーナーがいたから、と。私だけでは絶対に無理だったとね」

「あはは…恥ずかしいです」
「ゴールドシップも貴方にお世話になってるようですね」
「あ、はい。僕が今ここにトレーナーとして立っていられるのは彼女のおかけなんです」
「…そう。ゴールドシップは破天荒で訳の分からないことばかりする子ですけど、実は繊細な心の持ち主です」
「そう…なんですね。ゴールドシップに限らず、僕はまだみんなのことを全然知れてないので、この合宿を機に親しく慣れればと思います」
　ゴールドシップ。彼女は御祖母様に嫌われてると言っていたけど、御祖母様は随分とゴールドシップを気にかけていると思う。
「そうね。…実は相談がありまして」
「え？」
「話から察して貰えると思いますが、ゴールドシップは実はメジロ家の血筋でして」
「あ、はい」
「恥ずかしながら私、ゴールドシップに嫌われていまして。貴方と同じで今回を機に仲良くなりたいなと思っているのです」
「なるほど」
　ゴールドシップもメジロアサマさんもきっと不器用なんだろうなと思う。それなら

僕に出来ることは一つだけだ。
「分かりました!それでは僕が何とか仲を取り持つようにしましょう!」

◇◇◇

なんて大口を叩いた割には何をすればいいか思い付いてない。
どうしようかな…。なんて部屋で考えていたらドアがノックされる。
「トレーナー…さん?いますか?」
「あ、ライス?もしかしてもう時間かな?」
「はい。皆さんは準備が出来てもう玄関前で待ってますよ」
「ごめん!今すぐ行くよ!」
急いで部屋を出てみればライスがニコニコして待っている。何か良い事でもあったのかな?
「どうしたのライス。凄い機嫌が良さそうだね」
「はい!皆さんと合宿、トレーニングもそうですけどお泊まりが楽しみで!」
「そっか。じゃあ目いっぱい力をつけて楽しまないとな」
「はい!」

ライスと玄関へと向かう。普段履いてるスニーカーとは別に持ってきたサンダルを履く。砂浜での練習だからスニーカーは避けとかないと。
「あ、トレーナーやっと来た!」
「おーごめんね。マックイーンのおばあ様とお話してたんだ」
「えっ!?何を話されたんです!?何か私のこと仰ってましたか?」
「あ、マックイーン。いや、特には何も。世間話だよ」
「そうですか…ふぅ…」
まぁマックイーンが僕のことを話してたとしか聞いてないし、嘘は言ってないよね。それよりも気になるのはマックイーン達の格好だ。
「ジャージ上着着てるけど…暑くない?」
「ふっふっふっ!ご覧あれ!」
テイオーが勢いよく羽織っていたジャージを投げ飛ばす。羽織っていたジャージの下には競泳水着を着ていた。
「これがあるから別に暑くないよ!ハーフパンツも脱げちゃう!」
「羞恥心をもっと持ちなさい」
「あはは―!海だもん!泳いじゃうもんねぇ!」
テイオーは海で泳ぐ気満々だ。と言うかもしかしてみんな同じ格好?

まぁでも競泳水着でトレーニングも悪くはないか。別に運動性に欠ける訳でもないし。

「と言うかトレーナーさんも下、水着ですよね」

「あ、バレた？」

「ふふ。車を運転していた時とは格好が違いましたので」

「ふーん？ほーん？スズカはトレーナーのことが…？」

「なっゴールドシップ！」

「うぇーい!!」

ゴールドシップが急に駆け出し、それを追うようにスズカも駆け出して行った。さて、トレーニングやりますか。

◇◇◇

メジロ家のプライベートビーチだけあって、人は1人もいなかった。

これなら集中してトレーニング出来そうだ。

今はみんな砂浜でのランニングをしてもらっている。足を取られやすい砂浜での走りは、悪バ場コースの練習になると思う。

勿論ストレッチも入念にしてもらったし、日焼け止めも塗らせたので、熱中症に気を付ければ大丈夫だろう。
「やっぱりゴールドシップさん、ヘッドギアを外すと雰囲気とても変わりますわね」
「ゴルシちゃんが美人すぎるって？いやー参ったな」
「そこまで言ってません!!けど美人なのは認めますわ」
「おぉ？マックイーンが珍しくアタシのこと褒めた？お？お？」
「…ムカつきますわね」
あの２人は特に仲が良いなぁ。２人はメジロ家で面識があったおかげで仲が良いのかな。そう言えばゴールドシップのデビュー戦でメジロマックイーンのことを聞いた時、やけに詳しかったのもそういう事だったのかな。
「トレーナー。ランニング終わったよー。次は何する？」
「ん…そうだな。次は遠泳するか。まずはスタミナを付けようと思ってるからね。行けるか？」
「勿論！僕たちを舐めてもらっちゃ困るよ！ねぇみんな！」
「あったりめぇよ！」
みんな元気がよろしいようで、待ってましたと言わんばかりの速度で海へと飛び込んで行った。僕は水上バイクを借りてみんなの後を着いていく。

アサマさんとゴールドシップ、どうやって仲を取り持とうか考えながら、今晩の食事と今後のトレーニングついて考えるのだった。

１１．夏合宿!!!

「うっ…お腹が空いた…助けてくれ…」
「ええ…」
今僕はトレーニングを終わらせた皆を先に帰らせ、使った道具などをまとめ、いざ帰ろうしていた途中、何かウマ娘が倒れていた。
え？なんでこんなとこにいんの？
「あ、あの…大丈夫ですか？」
「お腹…空いた…」
「えーっと……カロリーメイトとかならあるよ…？」
トレーニング中に食べるかもと持ってきておいたゼリーやカロリーメイトを渡す。
流石にカロリーメイトは口の中の水分がやばいほど取られるから誰も食べなかった。チョイスミスったな。
「あ、ありがとう…助かる」
「うん。全部あげるよ」
しかしこのウマ娘。随分とボロい靴を履いてるんだな。ジャージは…トレセン学園

の娘かな？

てかこの娘はどこから来たんだ？この辺はメジロ家の別荘ぐらいしか無かったはずだけど。

「うぅ…足りない…」

「…え!?もう食べ終わったの!?」

アサマさんには申し訳無いけど、この娘を連れてこう。ここで見捨てるなんて僕には出来ないよ。

「ごめん。持ち上げるよ」

おんぶが1番安定すると思うんだけど、生憎背中にはトレーニングに使った道具たちを詰め込んだリュックがあるので、仕方なくお姫様抱っこになる。

「すまない…」

「いやいや気にしないで。困った時はお互い様だよ」

そう言って僕はちょっとかけ足で別荘へと向かった。

◇◇◇

この子の食いっぷりやばくない？メジロ家の別荘にある食糧底が尽きるんじゃない

か…？え？大丈夫ですか…？

　ほら、マックイーンなんて顔が引きつっちゃってるんだけど。

「ふぅ…ご馳走様」

「なんなんですの!?なんなんですの!?」

「まぁまぁマックイーン。落ち着いてよ」

　この大食いウマ娘。どうやら最近笠松の方から転入してきたオグリキャップ、と言うウマ娘だそうだ。

　先ほど帰ってきたメジロライアン、メジロドーベルと一緒にやって来たらしい。

「トレーナーさん！私達も明日からトレーニングに参加していいですか？」

「ん？あぁ全然いいよ！人が増えた方がみんなも良いだろうし」

「やったー！ドーベルにも伝えてきますね」

　ライアンは実に楽しそうな顔をして部屋から出ていく。オグリキャップは腹が減ったなとか呟いてる。本当に言ってるの？

「あぁそうだ。貴方はトレーナーだったか」

「そうだよ。鴛鴦（おしどり）　悠（ゆたか）って言うんだ。よろしくね」

「オグリキャップだ。先程助けてくれたこと、感謝する」

「気にしないで。オグリキャップもトレーニングに参加するの？」

「良いのか？」
「全然いいよ」
「ありがとう。明日から参加させてもらおう」
オグリキャップ。彼女の走りは素晴らしいと聞く。地方の学園からスカウトされて転入してきたのだ。相当なレベルに違いない。
彼女から何か参考になるものがあればいいなと思う。

◇◇◇

カポーン。とどこからか音が鳴る。僕は今絶賛めちゃくちゃに広いお風呂に入っている。てかこれ温泉ってレベルでしょ。広すぎる。
「あぁぁぁ～…」
あまりの広さに自然と身体も伸び、普段の仕事に疲れた社畜のおっさんのような声を出してしまう。気持ちがいい。
さて、今後の課題はトレーニングもそうだけど、アサマさんとゴールドシップの仲を取り持つこと。二人が普通に話し合えばいいと思うんだけどなぁ。それが出来たら苦労しない、か。

ガラッ…と扉の開く音がする。誰か入ってきたのかな。
…誰か入ってきたのかな!?
「よー!トレぴっぴちゃん!背中流してやんよ!」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
絶叫した。

◇◇◇

危うくのぼせるかと思った。何食わぬ顔して乱入してきたゴールドシップ。バスタオルの下はトレーニングで使っていた競泳水着を着ていたので、僕がセクハラとか色々な罪で捕まる恐れは低くなった。
だから普通に背中を流し合った。全くビックリさせてくれるよ。
「トレぴっぴちゃ～ん。何か今日ずっと悩んでる顔してんな!どしたん?話聞こか?」
「んぁ…えっと…ね」
ゴールドシップのことについて悩んでるなんて言っていいものなんだろうか。いや、ダメだろ。ダメダメ。
「何でもないよ。トレーニングをどうしようかなと思って。1週間しかないからね」

「うげぇ…お手柔らかに頼むぜ…」
「トライアスロンでもする？」
「…マックちゃんのシャー芯全部ハリガネムシに変えないといけねぇからもう行くわ！」
「あ……逃げやがったな」
どうしたもんかな。多分ゴールドシップはアサマさんの部屋に行くこと自体嫌がりそうだし、アサマさんに呼び出されるってのも抵抗がありそうだもんな。
どこか自然に話せるような環境を作ろう。うん。僕に出来るのきっとこれぐらいだ。
あとはトレーニングに集中だ！
よーし！明日からまた頑張るぞー！

１２．メジロアサマとゴールドシップ

夏合宿も終盤。残すところあと2日になった。砂浜や遠泳などを繰り返し、体力と筋力を付け、テイオーのダンスレッスンも繰り返し、ｗｉｎｎｉｎｇ　ｌｉｖｅもこれで大丈夫だと思う。

そして今、僕達はは少し遠めの所にある神社の夏祭りに来ている。

明日は軽めのトレーニングで済ませるつもりだし、今日は目一杯楽しんで欲しい。

「で、なんでゴルシは屋台やってんだよ」

「ふっ……このゴルシ様の焼きそばはトレセン学園じゃ大好評なんだぜ……？」

「そうなんだ。じゃあ一つくれる？」

「トレぴっぴちゃんなら無料でくれてやんよ！」

そう言うとゴルシは慣れた手つきで焼きそばを用意していく。

手際がいいな……なんて感心してるとはっぴ姿のマックイーンが横から出てくる。

「もうっ！なんで私がこんなことを……」

「そんなこと言っちゃって～！マックイーン結構ノリノリだったじゃん！」

「そ、それは……！ちょっとこういうこともやってみたかったなぁなんて思っていまし

たし……」
「ふふん！僕にも焼きそばちょうだい！」
テイオーも焼きそばを注文する。てか許可証とか大丈夫なのか……？
ま、まぁゴルシそういうとこ割とマメだしなぁ。大丈夫か。
微笑ましいとこを見てニコニコしてたら焼きそばを手渡される。
「なにニヤニヤしてんだよ！ほら出来たぜ！ゴルシちゃん特製焼きそばだ！」
「ありがと。はいお代」
「いやぁ！いらないって！それは他の屋台で使いなぁ！」
「ゴールドシップ……！」
ゴールドシップに感心し、焼きそばを受け取りその場を離れる。他の屋台で何を食べようかなぁと悩んでいたら、前方からとんでもなくデカいわたあめを三本持ちながら歩いてくるオグリキャップがいた。それ前見えてんの？
「オグリキャップ……だよね？」
「そうだが？」
「……えっ!?今あったわたあめは!?」
「……？もう食べたが？」
恐ろしすぎる。オグリキャップ。食べる速度もヤバいが、この娘は足がとんでもなく

柔らかかった。約一週間の間、間近でこの娘の走りを見たが、素晴らしかった。スズカを超える前傾姿勢、ありえないほどの加速力、体力も申し分ない。素晴らしいウマ娘だった。

　こりゃチーム所属済みだろうな。引く手数多だろうし。

「なぁトレーナー。ここの屋台は全部食べていいのか？」

「えっ」

　なるべく僕のお金で払おうと思っていたけど、オグリの食費は正直払えそうにない。うっ、でもそんなキラキラ輝いた目で見られても……！

「ここは私が払いますよ」

「アサマさん!?」

「オグリさん。好きなだけ食べなさい」

「いいのか……!?ありがとう！」

　とんでもない速度でオグリは駆けて行った。人にぶつかるなよ……。

　ってそんなことよりアサマさん！意外と来るのが早くてビックリした。

「ありがとうございます。悠さん。私はこの後すぐ始まる花火の時間までに来賓席に行けば宜しいんですね？」

「えぇ。メジロ家もこの祭りに関係してるのなら来賓席が使えますからね。そこなら

ゴールドシップと誰にも邪魔されず話せるかと」
「ふふ……。本当にありがとうねぇ。時間までに連れてきてくださるでしょう？」
「はい。って言ってもゴールドシップの奴、今焼きそばの屋台やってるんですよ」
そういい、焼きそばをアサマさんに渡す。多分この人じゃ買いにくいだろうからここで渡しちゃおう。
「これをゴールドシップが……？」
「はい。……あっ！焼きそばとか食べたことありませんか!?」
「ふふっ。食べたことならありますよ。私も――」
ヒュルルル～……ズドン!!
花火が始まった。花火の音で、アサマさんが何を言ったのか分からなかったけど、多分大丈夫なはず。
「もう始まっちゃいましたね！じゃあ自分今からゴールドシップを連れてきます！」
「えぇぇぇ。待ってますわ」

◇◇◇

「おいおい～！ゴルシちゃんの手を引っ張ってどこに行くんだよ～。愛の逃避行ってや

つか？」
「ははは……」
　丁度屋台を畳んでいたゴールドシップを連れてきた。タイミングが良くて助かった。ゴールドシップの代わりに屋台の片付けをしてくれてるスズカ達にはあとでお礼しなきゃな。
「……来ましたね」
「……っ！……お祖母様」
　アサマさんを見た瞬間にゴールドシップの先程までの態度、雰囲気全てが変わる。普段のゴールドシップからは想像も出来ないな。
「……ゴールドシップ。隣に座ってくれる？」
「……はい」
「悠さんも。こちらへ」
「えっ」
　ゴールドシップの隣を指していた。えっ話聞いていいんですか？
　しかし断るのもあれだし、ゴールドシップの目が『お前だけ逃げるな！』と言わんばかりだから……と思い席に座る。
「ねぇゴールドシップ。貴方のデビュー戦と、それから出たレースの話をしてくれる？」

「えっ……とですね。まずデビュー戦からなんですけど」
流石のゴールドシップもメジロ家の伝説の前では普段の言動は慎むんだな。ちょっと意外な場面を見れちゃったな。

◇◇◇

「そうですか。貴方が勝てたのも全部トレーナーである悠さんのおかげ、と」
「はい。私に合ったトレーニングを考えてくれて、それから私の無茶ぶりな行動にも全部着いてきてくれて、それででしてね」
さっきから僕の話になってない？ちょっと恥ずかしいんだけど！
いや本当に恥ずかしい。僕のおかげって……僕は何もしてないよ。トレーナーであるだけだ、実力も勝ったのもの全部ウマ娘であるみんなが頑張ったからなのに。
「ゴールドシップ」
「っはい！」
「貴方は貴方の走りを貫きなさい」
「……分かった」
「悠さん。悪いんですけど、先に戻って頂戴。ゴールドシップだけに言いたいことがあ

りますから」
「あ、分かりました！」
　そう言い席を立ち、この場を去ろうとする。
「この場を設けていただき、ありがとうございました。ゴールドシップとこうして話せたのも貴方のお陰です」
「いえいえ！それでは僕は先に戻らしていただきますね」

◆◆◆

　アタシとお祖母様だけになっちまった。お祖母様はアタシのこと嫌いじゃなかったんだな。全部小さい頃のアタシの勘違いだったってわけか。
「ゴールドシップ。貴方いつ悠さんを紹介してくれますの？」
「はい??」
　お祖母様??アンタ何言ってるんですか？え？トレぴっぴちゃんを紹介？いや今いたじゃん。紹介しなくても知ってるでしょうが！
「モタモタしてますとマックイーンに取られますよ」
「なっ……！アタシは別にそんなんじゃ……！」

「素直になりなさい。ゴールドシップ。私としてはマックイーンでも貴方でもどちらでもいいですわよ」

マックイーンもトレぴっぴちゃんのことが……？いやいやアタシは別にトレーナーのことなんて好きじゃねぇし！良い奴で大事なトレーナーだとは思ってるけどな！

「私も昔は自分のトレーナーを無理やりねぇ」

「ぶふっ」

お祖母様ってこんなキャラだったっけか？もしかしてアタシ、お祖母様似だったのか……？

１３．次のレースに備えて

無事夏合宿も終わり、何事も滞りなく夏休みも終わった。
９月となり、新学期のスタートを告げるチャイムが鳴り響いている。
今月は出走する予定は……スズカが神戸新聞杯に出走か。来月の１０月にマックイーンとライスが天皇賞・秋、ゴールドシップとテイオーが菊花賞だな。
「とりゃっ!!」
「危なっ!?」
部室のドアを蹴破るように開き、ゴールドシップがタックルをかましてきた。危ない危ない……。
「ふっ……このゴルシちゃんの動きを見破るとは……流石アタシのトレーナーだぜ!」
「もう……ゴールドシップったら」
ゴールドシップの後ろからスズカが現れる。その後に続くようにゾロゾロとみんながやってくる。今日はみんな集まるのが早いな。
「今日みんな集まるの早いね。やる気は十分って?」
「勿論だよ!なんたってスズカのレースがもうすぐだしね!僕の教えたステップ使って

ね～！」
「ふふっ、勿論よ」
そういえばレース自体が久しぶりか。みんなのやる気が上がるのも分かる。それじゃあトレーニング開始だ！

◇◇◇

日も暮れ始め、そろそろ寮の門限が迫ってくる時間帯になった。
トレーニングも終わり、今みんなはストレッチをしている。
「やっぱりスズカさんは速いですわね……。逃げで離されたら中々追いつけませんわ」
「ありがとう。先頭の景色は誰にも譲らせないから」
「スズカさん……カッコイイです！ブルボンさんといい勝負が出来そうですね」
ブルボン。ライスの口から放たれたウマ娘の名前。ミホノブルボン。
スズカと同じ逃げを得意とするウマ娘。今回のレースでの一番警戒するべきウマ娘と言っても過言じゃない。
「ミホノブルボンか。彼女本来は中距離、長距離が得意じゃなかったんだけどなぁ」
「えっそうなの？」

「そうそう。僕がアドバイスしたり、自主トレーニングに付き合ったらね」
「は？」
「え？」
「あ？」
「ん？」
　えっ。何？何でそんなに睨んでくるの？え？怖い。
「貴方何をやってますの!?敵に塩を送るような真似をするなんて！」
「いやいやだって僕がまだチーム作る前だし……仕方ないじゃん。彼女とても悩んでる様子だったし……」
「そうなの？」
　テイオーが反応する。そうなんだよ。彼女、ずっと悩んでたから。
「本当はブルボンって短距離向けのウマ娘なんだよ」
「ええ!?そうなの!?」
「そうなんだよ。でも彼女は三冠を目指してるんだってさ。その為には中距離と長距離を走れるようにならないとダメだろ？」
　僕がまだ先輩のパシリにされてる間、１人残って自主トレーニングをしている彼女を見つけた。関わりを持ったのはそこからだったな。

彼女の努力は今は報われてて嬉しいな。僕も頑張った甲斐があったってもんだ！
「それでは今のブルボンさんは貴方が育て上げたということですね…？」
「誤解だ！僕は少しアドバイスしただけだって！それを頼りに強くなったのはブルボン自身じゃないか。僕は何もしてない!!」
「本当に言ってますの…？」
「うん！それにブルボンのトレーナーさんも優秀な人だって聞いてるからね」
「…あーん？ルマンドのトレーナーって葛城？ってやつだっけか？」
ゴールドシップが何故かブルボンのトレーナーに反応する。てかルマンドってなんだよ。お菓子じゃんか。
「そうだけど…。それがどうかしたのか？」
「アイツはあまりいい噂を聞かねぇぜ？結果を出せればいいタイプのトレーナーみたいで、ウマ娘が怪我とかしちまったらすぐポイだとよ。実際そいつのチームはメンバーの入れ替えが激しい」
「そう…なのか。まぁ特に何とも聞かないし、ブルボンは大丈夫だと思うけどなぁ」
そうなのか。僕が斡旋した訳では無いし、もしブルボンが酷い目にあってたらと思わなくもないけど、本人からは何も無いしな…。多分大丈夫だと思いたい。
「まぁそんなこと話してても仕方が無い！僕達は僕達で集中しよう！それじゃあ今日は

解散！」
「ばいばーい！また明日ね！」
何事も起きずにレースを向かえればいいんだけど。何か嫌な予感がするな。まぁ気のせいだよな。

14．神戸新聞杯

今日は神戸新聞杯。チームディーバとして初めてスズカが出走する重賞レース。警戒するべき相手は同じく逃げを得意とするミホノブルボン。そしてチームスピカからスペシャルウィーク、リギルからはグラスワンダー…か。相手はかなり手強い。スズカ、頼むぞ…！

「何心配そうな顔をしてますの。スズカさんなら大丈夫ですわ」

「そうだよね…！スズカさん速いから大丈夫だよ！お兄さまも応援しよ！」

「…あ、あぁうん。そうだね」

お兄さま。慣れないなぁ。ある日突然ライスが「お兄さまと呼んでもいいですか…？」と言ってくるし、ライスの頼み事を断れない僕は一瞬で了承しちゃった…。まぁいいんだけどさ。兄貴として頼られることは悪い気分じゃない。

「なぁお花さん。ミホノブルボンとサイレンススズカ、どう思う？」

「そうね…差し同士であるグラスワンダーとスペシャルウィークでは終盤追い付けるのかは…正直不安なところね」

「だよねぇー。あの二人めっちゃ速いもん！あ～ちくしょー！怖くなってきちまった

じゃねぇーか！」
　スピカの沖野トレーナーとリギルの東条トレーナーだ。近くには…シンボリルドルフもいるじゃないか。気付かれたくないから見るのやめとこ。
「さぁそろそろ始まりますわ！ゴールドシップやテイオーも来れば良かったのに」
「まぁまぁ。あの二人もそろそろレースが近いからね。仕方ないさ」
　スズカの後はゴールドシップとテイオーだ。気張らないと！

◇◇◇

『今全てのウマ娘たちが綺麗なスタートを切りました!!おぉ!?これは!!ミホノブルボンとサイレンススズカ!!並走しながら後方を離していく!!初っ端からフルスロットルか!?』
　スズカの作戦は大逃げだ。彼女の体力とスピード。この２つがあれば最初からフルスロットルでも負けることは無い。むしろ大差で勝つ、それぐらいの自身はあった。
　決して楽観視していた訳では無かったけど…まさかブルボンがここまで実力を付けていたとは！
「ブルボンさん…速い…」

「まさかあのスズカさんに追いついて行ける方がいるなんて…！」
「…ぐっ…！負けるなスズカ…！」
自然と拳を握りしめてしまう。スズカ、絶対に負けるな!!
『サイレンススズカ!!ミホノブルボン!!ペースは相変わらず落ちない!!後方との差はどんどん離れていく!!第3コーナーも終盤だ!!これは2人の一騎打ちとなるか!?』
アナウンサーの実況が耳を突きぬけていく。僕は今目の前の情景に目を奪われていた。スズカのフォーム、表情全てが綺麗だった。
彼女は、彼女たちはいつだって僕に夢を見せてくれる。
なぁ、僕は彼女たちに夢を見させてやれているのかい？
「トレーナーさん!?ボーッとしないでくださいまし!!最終コーナーですわよ!!」
「えっ…あ、ごめん！」
『さぁ第4コーナーも終盤だ!!最後の直線に入る!!先頭は相変わらずサイレンススズカもミホノブルボン!!決して二人とも先頭を譲らない!!これは凄いぞ!!そして１０バ身程離れてスペシャルウィークとグラスワンダーが構えてる!!ここから巻き返せるか!?』
あれ程の差が最終直線で開いてる。スズカ。お前はミホノブルボンに集中するんだ！スズカ！スズカ!!
「スズカー!!!行けー!!!」

柄にも無く大声を出してしまった。その時、スズカは確かにこちらに向いて微笑んだ気がする。

『おおっと!?!!サイレンススズカここで抜け出したー!!!サイレンススズカサイレンススズカだー!!サイレンススズカ!ミホノブルボンとここに来て差をつけ始めるー!!そのままゴール!!!1着はサイレンススズカだー!!!!!』

「やりましたわー!!!」

「スズカさんが勝ったー!わーい!わーい!」

「よっしゃー!!!」

スズカが勝った。直前までどうなるか分からなかったけど、やはりスズカは強い。あの速度で逃げ切れるスズカ。尋常じゃない。さしずめ異次元の逃亡者ってとこかな。

良かった。次は菊花賞だ。このまま連勝して、僕たちのチームは強いということを証明してやろう!!

15．タキオン製薬

残暑の時期が過ぎ、少し肌寒くなってきた今日この頃。肌着を半袖から長袖に変えた僕は、2人分の弁当箱を持ってトレセン学園のとある場所を目指し歩いている。

「…はぁ。今日は何されるんだか」

10分後ぐらいには変化する自分の体を案じつつ、弁当を崩さないように少し早足で目的地へ向かう。おにぎりがいいって言ってたけど、具は何でも良かったかな。シャケとか安直なものばかりだけど。

「タキオーン。いるー？」

目的地の扉をノックする。すると室内からドタバタと物音がし、「ちょっと待ってくれないか！」と声がした。

どうせ研究道具とか片付けてるんだろうな……せっかく弁当温めてきたんだから早くしてくれ…とか思いながら数分扉の前で待つ。

「やぁ！トレーナー君！待ってたよ！」

「ははは…待ってたのは僕なんですが。弁当冷えちゃったかもしんないよ」

「えーっ!?それは困るな！早く食べようじゃないか！」

しっぽをぶんぶん振り回しながら椅子に座るタキオン。こういうところは素直で可愛いな…とか思ったり。対面に僕も座り、タキオンに弁当を渡す。
「ふむ。おにぎりか。具は何かな？」
「シャケと昆布、あとはからあげとか入れてみた」
「ほ～？美味しそうじゃないか。まぁトレーナー君のご飯何でも美味しいからね」
「嬉しいこと言ってくれるじゃない!!」
料理は割とする方だし、褒められるのは悪い気分じゃない。もっと褒めてくれてもいいんだよ!!
「んでタキオン。僕は今日は何の用で呼ばれたの？」
「……あー…えーっと…そう！実はね…」
ガシャーン!!
何かシャキッとせず、口ごもってるタキオンの背後からビーカーやら何やらガラス製の物が割れる音がした。
「とー!!!」
「えっ!?あべしっ!!」
タキオンの背中をよじ登り、そのままジャンプしたかと思えば弁当スレスレに着地し、このままこっちに向かってきて急に顔面を蹴りに来た。嘘だろ??この小さいウマ娘

誰なんだ…
「と…トレーナー君…大丈夫かい？」
「そこまでの威力じゃなかったから何とか…ね」
「じ、実はそのウマ娘の子守りを頼みたくてね…」
「子守り？いや、別にいいけど…この子誰だい？」
まじまじと小さいウマ娘を見る。前髪はパッツンで綺麗に長く伸びた芦毛が特徴的なウマ娘だ。顔も整っている。どこかゴールドシップに似ているような…。
「そのウマ娘…ゴールドシップだよ」
「え？はい??」
「私の研究中の薬を勝手に飲んじゃってね。特に害はないが、何故か幼児化してしまったんだ」
「おいおい困るよ！来週に菊花賞が控えてんだよ!?」
「大丈夫だ。その薬の効果は明日の朝には戻る」
「それは良かった…」
その言葉を聞いて安堵した。菊花賞に間に合わなかったらゴールドシップの頑張りはどうなってしまうんだ。
その時はタキオンを責めよう。当分ご飯抜きも良いかもしれない。

「まぁという訳だ。迷惑を掛けた代わりと言ってはなんだが、弁当箱はしっかり洗って後で返そう。では頼んだよ！」

厄介者を押し付けてやった！みたいな顔をされて研究室を追い出されてしまった。弁当まだ途中なんだけどな…。

「なぁなぁ！あんたなにものだ!?あたしのとれーなーか!?」

記憶が無いのか…？これはマックイーンとかに見せたら面白い反応してくれそうだな。

「自己紹介しようか。僕は君のトレーナーだよ。鴛鴦　悠って言うんだ」

「ゆたか……。えっと…あたしはごーるどしっぷ！」

「元気だね」

「まぁな！ごーるどしっぷちゃんはいつでもげんきだぜ！」

可愛らしいな。幼い時のゴールドシップをこうして見れるなんて。この可愛さ、ディーバの皆に共有しよう！

「そしたらチームのみんなを紹介したいから着いてきてくれる？」

「いいぜ！あんないしな!!」

「よし。じゃあ行こうか」

ゴールドシップを持ち上げ、自分の肩に乗せる。所謂肩車ってやつだ。ゴールドシッ

プの今の身長は１２０あるかないかぐらいだろうな。小さくて軽い。
「うぉー!.たけぇー!!.よっしゃ!!.とれーなーごうはっしんだー!.」
「任せなさーい!.」
後に学園内で幼女を肩に乗せ走る、体が黄緑色に発光不審者が目撃されるという噂が流れるとか。

◇◇◇

「えぇ!?.これゴールドシップですの!?.」
「おーよ!.めじょまっきーんだっけ?.よろしく!.」
「メジロマックイーンですわ!.」
「めじょまっきーん!.」
舌っ足らずの感じが可愛い。ゴールドシップは元々は美人だが、幼くなると美人というよりは可愛さが目立つな。
「いぇーいゴールドシップ!.僕が遊んであげるよ!.」
「私も遊んであげるわね」
「ゴールドシップさん。パン食べますか?.」

一躍みんなの人気者になったゴールドシップ。色んな人に構われて楽しそうだな。構われて嬉しそうなのは今も昔も変わらないってことか。

「…まぁゴールドシップがこんな姿になってしまったが、来週に菊花賞が控えてることは変わらない。テイオー。シンボリルドルフを目指すのならば、ゴールドシップを負かしてみろ」

「…任せてよ。僕は負けないよ」

……仲間のどちらかが負け、どちらかが勝つ。せめて敵同士であればと思わなくもない。けれどこれは彼女たちが選んだ選択だ。僕がとやかく言う資格はない。

「よし。ゴールドシップの子守りは任せてね。君たちはいつも通りトレーニングだ！」

ゴールドシップを肩車し、トラックへと向かう。僕が彼女たちに出来ることはトレーニングを見て、アドバイスするぐらいしか出来ない。走り、勝つのは彼女たちだから。

◇◇◇

さて。ここで問題が発生した。夜、ゴールドシップは誰が面倒を見るのか。トレーニングを終え、普通に帰ろうとしたらゴールドシップがくっついてきた。離れなさいと言っても離れない。

そんなゴールドシップを見てマックイーンが一言。

「トレーナーさん。ゴールドシップさんの子守りは任せろって言ってましたよね？」

という訳で、今僕はトレセン学園内のトレーナー専用寮で、幼女ゴールドシップを寝かしつけたのだが、そこに至るまでに、一緒にご飯を食べ、一緒にお風呂に入った。

これ犯罪じゃないよね？元の姿に戻ったら僕蹴り殺されない？大丈夫??

願わくば記憶が残っていませんようにと神に祈る他なかった。